
CLEAR

Sumire

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLEAR

【Nコード】

N6108X

【作者名】

Sumire

【あらすじ】

ある日登校中に真っ白な捨て猫を見つけた白川晃平。

その猫は喋る猫で不思議に思った晃平は家族も猫好きなので家に連れて帰る事にする。

その日の夜、晃平は猫に「願いをかなえてあげる」と言われ……

捨て猫

「わたし大人になったら、こうへいのおよめさんになるー」
冬青^{ふゆぎ}緑^{みどり}が目の前に立っている。そして笑顔でこちらを見ている……

そのとき目を覚まし起きあがる。

なぜ今頃になって緑の夢を見たのかわからない。

緑は小学二年生のときに転校してしまった。

今は高校二年生なので八年は会っていないことになる。

緑がこの町に住んでいたときは家も隣で毎日のように遊んでいた。

そして引越しの日に緑は「また会おうね」と言っていた。

「本当にまた会えるのかな……」

緑が引越したのは父親の仕事の都合だった。

隣にある緑の家は、まだそのまま残っている。

もしも戻ってくるとしたら、やっぱり隣の家に住むことになるだろう。

そうすれば、また昔のように……というわけにもいかないか。

もう高校生なのだから小学生のときと同じというわけにはいかない。

「お兄ちゃん、まだ寝てるの？」

この声は妹の秋沙^{あいさ}だ。

俺の部屋が二階にあるため階段を上る足音も聞こえる。

「もう起きてるよ」

いつも朝はこんな感じ。

秋沙はなぜか俺のことを気遣ってくれる。

「朝ごはん、早く食べてよー お母さんが困るから」

「わかったよ」

俺は制服に着替えてリビングに向かう。

テーブルの上には湯気の立っているご飯とみそ汁、そして卵焼きが置かれている。

椅子に座り朝食を食べ始める。

母さんと秋沙はキッチンで何やら洗いものをしているようだ。

この二人は本当に中が良い。

母さんがとても若く見えるため秋沙と姉妹だと間違われることもある。

実際、後ろから見ると友達同士が楽しそうに料理や洗いものをして
いるようにしか見えない。

「あ、もうこんな時間！私、学校行くね」

「いつてらっしゃい」

母さんは俺が家を出る時も秋沙が家を出る時も玄関の外まで出て見
送ってくれる。

秋沙を見送った母さんはリビングに入ってきて俺と向かい合う位置
の椅子に座る。

「ごちそうさま」

「はい」

母さんは座ったばかりなのに、また立ちあがり俺が使った食器を片
づける。

そして洗面所に行き顔を洗う。

「じゃあ、俺も行ってくるわ」

「いつてらっしゃい。がんばってね」

母さんは玄関まで来て笑顔で言っている。

「いつてきます」

家から出ていつもどおり学校に向かう。

いつも学校につくまでは一人だ。

学校は歩いて十分ほどの位置にあり、仲の良い友達の家は逆方向に
あるからだ。

そのままいつもどおりの道を歩きながら学校に向かうが、その途中
で一匹の捨て猫を見つける。

ダンボールの中に入れられ、ただ道路の端に置かれているだけだ。
こんなふうに捨てられている猫を見たのが初めてだったので少し気

になったが、そのまま学校へ向かう。

教室に入るといつもどおりの皆がいる。

制服を着崩している人がとても多いのもいつものことだ。

この学校……白峰学園しろみねがくえんには校則がほとんどない。

そのため制服を着崩している生徒が多い。

校則がほとんどない理由は初代校長の決めたことだ。

「校則には当たり前のことしか書かれていない。わが校には、そんなものはない」

これが初代校長の言葉だ。

当然まわりの人々は反対していたが、それを無視して決めたのだという。

校則が無いというのに驚くことに、この学校で大きな問題が発生したことは一切ない。

だからこそ初代校長の意志がここまで受け継がれてきているのだと思う。

授業中も皆、静かにして集中している。

そして、帰りのホームルーム。

「起立。礼」

「さよなら」

日直が行った後、皆が言う。

そして、このあとは下校するだけ。

部活に入っている人は、そのまま部活に向かっていく。

玄関に向かい、靴を履き替え学校から出る。

帰り道も同じ方向に帰る友達がいないため一人。

いつもと同じ道を通って下校する。

そして朝に猫が捨てられていた場所を通る。

朝と同じようにダンボールの中に猫がいる。

普通、半日もの間同じ場所にいることはあるのだろうか？

猫を飼ったことはないのによくわからないが、

猫といえば常に外を歩き回っているイメージがある。

そのため少し心配になったので近づいて様子を見ることにする。

近くで見ると、とてもかわいい。

真っ白な毛に小さな体……その大きさから、まだ子猫だと思われる。
手を出し頭を撫でてみると、とても嬉しそうな顔をする。

「お前、かわいいな」

「そうですか？ありがとうございます」

猫に話しかけたのは、これが初めてだった。

そして返事が帰って来たのも……

「今、お前喋ったよな？」

「はい」

「すげー……」

喋る猫に会ってしまった……どうしよう……

母さんも秋沙も猫が好きだから、このまま連れて帰ってもいいのだから……

捨て猫（後書き）

猫を飼ってみたいです。

緑の苗字の冬青は木の名前です。

毎日更新できないかもしれませんが、よろしくお願いします。

話せる理由

「どうしました？」

「え？お前、うちに来ないか？」

「いいんですか？そんなふうに言ってくれたの、あなたが初めてですよー」

「そうか？じゃあ、着いてこいよ」
「そう言い、もう一度歩き始める。」

喋る猫に会ってしまった……これは他の人にも教えたほうがいいのか？

「そうそう、私が喋る猫だっていうことは他の人に教えないで下さいよ」

「お前……心も読めるのか？」

「え？そんなことできませんよ」

「じゃあ……今の偶然？」

「多分そうですね。本当に誰にも言わないでくださいよ？」

「わかったよ」

この白い子猫は、どうやらメスらしい。

声が人間の女っぽいからだ。それも結構かわいい声。

「そういえば、なんで喋れるの？」

「喋れるんじゃないくて、あなたにだけ聞こえてるんですよ」

「……なんで俺なんだよ？」

「それは、あとでゆっくり教えます。」

「そう……ほら着いたぞ。ここが俺の家だ。」

白い子猫を抱きあげる。

「ちよっと……急に何するんですか？」

「うるさい」

家の玄関のドアを開けて家の中へ入る。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

母さんが玄関に来る。

「晃平、その猫どうしたの？」

「捨て猫。懐いたから連れてきた」

「へー　こんなかわいい子猫ちゃんを捨てるなんて……」

飼い主は、どんな神経してるんだろうね」

「とりあえず、こいつ飼ってもいい？」

「いいわよ。じゃあ、とりあえずお風呂に入れてあげたら？」

「そうだな。このままだったら家の中に入られないもんな」
いくら真っ白でキレイな毛でも泥や砂埃くらいはついている。

風呂場に入り、体を洗おうとする。

「な、なにするんですか!？」

「いいから動くなつて。洗ってやるから」

「……痛くないですか？」

「大丈夫だよ。ほら」

シャワーを使い子猫の体を洗う。

流れていく水は少し濁っているのがわかる。

「温かいです」

「うん。次は石鹸使うからな」

「痛くないですか？」

「またそれか？　大丈夫だよ」

泡をたてて、手を使いながら子猫の体をキレイにしていく。

「気持ちいいですね。毎日これをやっているんですか？」

「そうだよ。汗かくしな」

体が段々キレイになってくる。

「よし、泡流すぞ」

「もうですか？」

「うん。あーもう逃げるなよ」

逃げようとした子猫を無理矢理抱き上げ泡を流し始める。

「もう終わりですか？」

「うん。あとは体拭いて終わり」

風呂場から出ると、母さんが子猫を拭くためのタオルも用意してくれていたようだ。

子猫の体を丁寧に拭く。

「そういえば名前なに？」

「ありませんよ」

「は？」

「だから、ありません。あなたがつけてくれませんか？」

「やだよ」

「ひどいです。じゃあ私のことをなんて呼ぶんですか？」

「猫」

「……」

「ダメか？」

「あたりまえですよ……お願いします名前を考えてください」

「そういうのは秋沙に任せたほうがいいと思うけど？」

「では秋沙さん？にお願いします」

「うん。晩飯のときに考えるように頼んでおく」

「ありがとうございます」

「ほら拭き終わったぞ」

「ありがとうございます。私はどこにいればいいですか？」

「そうだな……多分母さんたちも歓迎してくれると思うからとりあえずリビングに行くか」

リビングに向かおうとすると子猫は足下を歩いてくる。

「もう洗ったの？」

「うん。意外とキレイだったからさ」

「今日の夜、お父さんが帰ってきたらその子の歓迎会やるから」
母さんは子猫を抱きあげニコニコしている。

「そう……じゃあ俺、部屋にいるから準備できたら呼んで」

「わかってるわよ」

母さんは子猫を床に下ろし台所へ向かう。

そして部屋に向かおうとするが部屋は二階にある。

階段を上る時に子猫が辛そうだ。

「大丈夫か？」

「無理です」

「しょうがねーな」

子猫を抱き、階段を上り部屋に入る。

「そういえば俺にだけお前の声が聞こえる理由ってなに？」

「それはですね……私はあなたの願いを叶えなくてはいけないからです」

「は？なに言ってるの？」

「だから願いを叶えるんです」

「お前には無理だろ」

「できますよ！一つだけですが……」

「そうか……猫の声が聞こえる時点でどうかしてるし、信じてみるか」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「うん」

「それで願いはなんですか？」

「うーん……あるんだけどな……」

「はやく言ってくださいよ」

「いや考えとく」

「そうですか……思いついたらいつでも言うてくださいね！」

「わかったよ」

「晃平――準備できたわよ――」

「わかった――今、行く――」

ほら準備できたみたいだから行くぞ」

「……階段があります」

「はいはい」

もう一度、子猫を抱きあげ階段を下りていく。

歓迎会

リビングに入ると捨て猫の歓迎会とは思えないほど豪華な料理がテーブルに並んでいる。

「すごい豪華だな」

「そうだよ。お母さん、すごく嬉しそうだったもん」

「そういえば母さん猫好きだったけ？」

「うん！」

秋沙もすごく嬉しそうな表情をしている。

「ただいま」

玄関から聞こえる声……どうやら父さんも帰って来たらしい。

「おかえりー」

秋沙は玄関に駆け足で向かっていく。

「ただいま。今日はなんかあったのか？」

父さんはテーブルの上の料理を見て驚きを隠せないようだ。

「家族が増えるんだよ」

秋沙はニコニコしながら言う。

「まさか母さんに子どもができたとか？」

「違うよ。お兄ちゃんが捨て猫を拾って来たの」

「猫か……もしかして、その白い子猫か？」

父さんは床をゆっくり歩きまわっている子猫を指差す。

「そうだよ」

「かわいいじゃないか」

「じゃあ父さんも承認したっていうことでいい？」

「いいぞ」

そう言う父さんは自分の部屋に入っていく。

そして、すぐに着替えて部屋から出てくる。

「そういえば名前は？」

「あ、忘れてた。秋沙、こいつに名前つけてやってくれないか？」

「え？私がつけていいの？」

「うん。俺、ネーミングセンスないから」

「やったー！でもお兄ちゃん、そう言っただけ考えるの面倒くさいだけでしょ？」

「さあな」

さすが秋沙といったところだ。

なぜか、いつも俺の考えていることが理解されている。

「さあ、お父さんも帰って来たし、もう食べましょう」

「そうだな。俺も腹減ってるし」

父さんと母さんが言ったため、俺も秋沙も椅子に座る。

そして子猫を少し大きな椅子に座らせて、

「いただきます」

食事を食べる前に家族全員でこう言うのは、いつのまにか当然のことになっていた。

母さんの作った、おいしそうな料理を食べていく。

「お兄ちゃん、これ私作ったんだよ。食べてみて」

そう言っただけ秋沙が皿に取り、俺の前に置いたのは肉じゃがだ。

見た目は結構、本格的だ。

そして口へ運ぶ。

「うまい……」

口に含んだ瞬間に自然と出てきた言葉だった。

「本当？やったー！白雪ちゃんも食べてみて！」

次は子猫の前に皿を置く。

「白雪ちゃんって、そいつのことか？」

「うん。ユキちゃんだったら、ありきたりだから「白雪」ちゃん」

「そうか。いい名前だな。白雪」

俺は子猫に笑顔で話しかける。

「はい。とってもいい名前で嬉しいです」

白雪も嬉しそうだ。

そういえば白雪の声は皆には聞こえてないんだ……

だから今、返事してしまったら不思議に思われるな。そう思って白雪との会話は、これで終了。

「ちょっと！無視しないでくださいよ！ねえ……」

白雪が少しかわいそうだが今は無視するしかない。

あとで二人つきり……

一人と一匹だが、そうなれたときに説明すれば許してもらえるだろう。

このあとは、いつもどおりの食事となにも変わらなかった。

しかし本当に家族が一人増えたかのように皆、白雪に話しかけている。

返事が返ってこないとわかっているのに何度も……本当の家族のよう。

俺には、ちゃんと白雪の言葉が聞こえている。

だから会話ができて当然だ。

しかし言葉が聞こえていないはず秋沙も母さんも父さんもちゃんと話すことができている。

皆、白雪がなにを言っているのかわかっているようだった。

もしかしたら、これができるのは白雪を「ペット」ではなく本気で「家族」として見ているのかもしれない……

☆☆☆

食事を食べ終え、俺と白雪は部屋に戻って来た。

「どうだった？」

「どうだったって……とても楽しかったですよ。皆、いい人でしたし」

「そうか……よかったな」

「はい！」

白雪はとても嬉しそうだ。

「そういうば願ひ事、考えましたか？」

「考えたけど、もう少し待ってくれないか？」

「わかりました。では気が向いたらいつでも言ってくださいね」

「おう。今日はもう眠いから寝るけど、お前はどうする？」

「私も、もう寝ます。このクッション使っていいですか？」

「いいよ」

俺はベッドに潜り込み、今日起きたことを思い出してみる。

学校に行く時からいた捨て子猫に帰り道で話しかけて……

それで、その子猫が喋る猫だったりして……

すごいな。

思い出してみると、たった一つの行動で今までの常識が変わってしまっただけのことだ。

あまり深く考えても、どうすることもできないのでそのまま寝ることにした。

白雪の登校

「起きなくていいんですか？」

胸のあたりに何か小さいものが乗っているのがわかる。
軽いのだが少し苦しい。

目を開けると胸の上に白雪が乗っていた。

「おはようございます」

「おはよう……」

ガタガタガタ

「お兄ちゃん、朝だよー」

階段を上る音とともに、いつもどおり秋沙の声が聞こえてくる。

「起きてるよー」

秋沙には、そう返事をして白雪を床におろす。

「どこか行くんですか？」

「学校だよ」

「私も行っていいですか？」

「ダメ」

「行きます」

「ダメ」

「いきます！」

「……」

「無視しないでくださいよ！」

「してねーよ。とにかくダメだ」

「そういうきまりなんですか？」

「そう……でもないな……」

よく考えれば校則ないんだった……

つまり学校につれていっても、なにも問題がないわけだ。

「じゃあ、いいですね？」

「どうなっても知らねーぞ」

「いいですよ」

「じゃあ、このカバンの中に入ってる。学校についても絶対に出るなよ」

「わかりました」

白雪は、とても嬉しそうだ。

まだ出発するまでは時間があるというのに、もうカバンの中に入っている。

一回に行き朝飯を食べる。

「そのカバンなに？」

秋沙は珍しくカバンを二つ持っているのが不思議に思ったのだろう。

「白雪をつれていくんだよ」

「なんで？」

「学校に行きたいって言ったから」

「なに言ってるの？もしかして白雪の言葉がわかるとか？」

「そんなわけないだろ」

「冗談だよー じゃあ私、行ってくるから」

秋沙は玄関に行き、母さんにも「行ってきます」と言い学校に向かう。

俺も朝食を食べ終えて、顔を洗って学校に行こうとする。

「いってらっしゃい」

「行ってきます」

いつもどおり母さんと挨拶を交わし家から出る。

白雪の入っているカバンが意外と思い。

「こんなに重かったっけ？」

「酷いですよ……女の子に重いなんて……」

「お前、メスだったんだ」

「そうですよ」

この様子をまわりの人が見ていたら俺は、ただの不審者だろう。誰もいないのに一人で喋っているのだから。

「晃平！久しぶりー」

そのとき後ろから誰かに呼び止められて少し驚いた。
でも一人で喋っていることにはきづかれていないようなので大丈夫
そうだ。

そして振り返ってみると、そこには見覚えのあるような女の子が立っている。

同じ学校の制服を着ているので知っている人だと思うが……

「あれ？もしかして私のこと忘れた？」

「えーと……」

「緑だよ。やっと、この町に戻ってこれたんだー」

なんと俺の目の前に立っている、この美少女が幼馴染の緑だという。
言われてみれば面影があるような気がする。

「えっー！」

俺は思わず声を出してしまった。

「そんなに驚くこと？」

「うん。すげーかわいくなってんじゃん……」

「そ……そんなことないよ……」

言ってから思ったが今、すげー恥ずかしいこと言ったよな……

「そういえば、その制服着てるってことは今日から同じ高校に通う
のか？」

「うん。そういうわけで今日からよろしくね。」

じゃあ、私はあとで行くから。同じクラスになれるといいね！」

「うん」

緑は家に戻っていく。

本当に驚いた。

もう戻ってこないと思っていたのに、戻ってくるとは……

白雪に願うこともこれでなくなってしまったわけだ。

それにしても、すげーかわいくなってたな……

「なんで顔赤くしてるんですか？早く学校、行きましようよ」

「わかったよ」

カバンの中の白雪が言うとおりの、もう一度歩き始める。

転校生

学校につくと、すぐに朝のホームルームの時間になった。

「えー、今日から新しい仲間が増えます」

先生の一言でクラス中が盛り上がる。

「男？女？」

「そういえば席、一つ増えてるね」

「どんな人かなー」

など様々な声が聞こえている。

そして俺は緑が転校してくるということを知っていたので同じクラスだということに驚き、同時に嬉しかった。

「静かに！じゃあ、入ってきて」

一瞬シーンとするが緑が教室に入って来た瞬間、クラス中がまた盛り上がる。

特に男子からは、「かわいい」などのほめ言葉が多い。

「冬青緑です。よろしくお願いします」

緑は黒板に名前を書き、一礼をする。

「緑さんは、奥のあいている席に座ってください」

「はい」

緑は自分の席に向かっていく。

残念ながら俺の席からは結構、離れている。

「では一時間目は自習にします。」

冬青さんのことが気になると思うので一時間目は自由にして下さい
い」

「よっしゃー」

男子からは、またも喜びの声飛び出す。

このクラスの男子はいつも元気というかうるさいというのか……

朝のホームルームが終わったあとは緑のまわりにたくさんの人が集まっている。

その全ての人を相手にしながらも緑は楽しそうに話している。

「昔から変わってないな……」

小声で言った独り言のつもりだった。

「緑さんって、すごいですねー」

しかし今日は違う。

机の横に置いてあるカバンの中には白雪がいる。

「学校では喋らないでくれないか？」

「なんでですか？他の人に聞こえないんですよ？」

「俺が無意識のうちにお前と話してたら、俺が変人扱いされるだろ」

「そうですか……わかりましたよ……」

白雪はカバンの奥に入っていく。

緑はまだたくさんの人と話している。

男子も女子も……このクラスのほとんどの生徒が緑の近くにいます。

キンコンカーンコン

チャイムが鳴り一時間目が終わる。

終わったあと何人かの女子が緑のまわりにいたが、

その人たちになにか言いこちらに向かってくる。

「晃平、今日の放課後に学校を案内してくれない？」

「え？いいけど……」

まわりの人たちが驚いた表情で俺を見ている……

「ちょっと廊下、出よう」

緑の手を掴み廊下に出る。

「急にどうしたの？」

「ちょっと教室だったら話しづらいから……」

「ああ、そういうことね。じゃあ放課後よろしく！」

「おう」

緑は教室に戻っていく。

そして俺も教室に入ろうとした時……

「なんで喋って無いくせに冬青と仲いいんだよ？」

「いや……その……」

「もしかして知り合いだったとか？」

「う……うん。そんなところだな……」

なんで俺は戸惑ってるんだよ……

キーンコーンカーンコーン

俺に話しかけてきた男子生徒は教室の席につく。

チャイムがなると同時に席につくというのは自然とやっていることなので、

今のチャイムに救われたような気がする。

二時間目からは普通どおりの授業が行われる。

なんか緑に学校の中を案内するのが待ち遠しくなってきた。

授業中はノートを書く以外にやることがないので暇だ。

そういえば今日は白雪がいる。

いいことを思いついた。

ノートの切れ端に「なんかおもしろい話して」

と書いて白雪の入っているカバンの中に入れる。

「授業中は授業に集中しないとダメですよ」

なんでこういうときに限って正論が返ってくるんだよ……

白雪が話したくて仕方がないという予想は間違いだっらしい。

結局いつもどおり授業を受ける。

ピアノ少女と白雪の願い

こんなに一日の授業が長く感じたのやっとな放課後になった。
は初めてかもしれない。

「晃平、案内してよ」

「うん。じゃあ行くか」

緑に授業でよく使用する教室を説明していく。

体育館、視聴覚室、理科室、コンピュータ室……

色々な教室を案内して最後に音楽室に行くことにした。

「あれ？ピアノの音聞こえない？」

「本当だ」

ピアノの音は音楽室の中から聞こえているようだ。

「ねえ、行ってみようよ」

「うん」

音楽室の前に来ると音がとてもよく聞こえる。

弾いている曲は聞いたことのない曲だった。

「この曲、知ってる？」

「知らない」

「晃平も知らないんだー なんかいい曲だね」

「そうなんだけどなー……なんか違うんだよ……」

「言われてみれば、なんか音が悲しんでいるっていうか……」

「そう！そんな感じ！」

「晃平！声大きいよ！」

そのときピアノの音が止まる。

ドアが開いているため俺たちの姿はピアノを弾いてた人に丸見えだ。

「私のピアノ、聞いてましたか？」

「すいません……上手かったから、つい聞いてました」

「そうですか……ありがとうございます」

「今、弾いてた曲ってなんていう曲ですか？」

「私が自分で作った曲です。曲名はまだ決まっていんですが……」

「すごいですね。他の曲は無いんですか？」

「……ありません」

「そうですか……もう弾かないんですか？」

「人に聞かれるのって、なんか緊張するんですよ」

「そうですか……俺たちは、もう行くので続けてください」

俺と緑は音楽室を出ようとする。

「待ってください……せつかなので聞いてくれませんか？」

「いいんですか？」

「はい……私もこのままだとダメだと思うので……」

「わかりました」

ピアノを弾いていた女の子はピアノの前の椅子に座り

俺と緑は授業用のときにも使う椅子に座る。

そして演奏が始まる。

廊下で聞いていた曲と同じものだ。

明るくてとてもいい曲だ。

しかし、なにかが違う……

音が悲しんでいる……これが正しい表現なのかはわからないが音楽など全く知らない俺にもわかるほどだ。

演奏は三分間ほどで終わった。

「すごいですね」

俺と緑は拍手をしている。

「実は私、人と話すのが苦手なんです……」

女の子は突然、口を開く。

「え？」

「だから私はピアノで自分の想いを伝えることにしたんです」

「それで、そんなにピアノが上手いんですか？」

「上手くなんかありませんよ。私はピアノにウソをつけません。だから……」

「それでもすごいですよ。それだけピアノが好きだっていうことな

んですから」

「とても優しい人なんですね……名前、教えてくれませんか？」

「晃平です」

「私は、彩音あやねです。もしあなたみたいな友達がいたら……」

「どうかしましたか？」

「いいえ……なんでもありません。では私はもう帰るので」

彩音は音楽室から出ていく。

「なんか不思議な人だったね」

「うん。俺たちも帰るか」

「そうだね。一緒に帰るのも小学校以来だね」

「そうだな」

そういえば緑は彩音さんがいたとき、全然喋っていなかったような気がする。

教室では、たくさんの人の相手を同時にしてたというのに……
まあ、ただの気のせいだろう。

☆ ☆ ☆

久しぶりの緑と一緒に下校。

緑は転校先の学校のことを色々教えてくれた。

そして昔の思い出話などもしながら歩いている。

「じゃあ、また明日ね」

「じゃあね」

緑の家の前で言い、俺も家の中に入る。

「ただいまー」

「おかえり。そういえば緑ちゃんが戻って来たんだって？」

「うん」

「よかったわね。昔から仲良かったもんね」

「うん」

俺は部屋に向かう。

「今、服出すから動くなよ」

「はい」

俺は白雪の方を見ないようにタンスの中にある服を出す。

「これ、俺のだけどとりあえず着て」

「ありがとうございます」

「着替えましたよ」

「おう」

白雪の体は、あまり大きくなかったため俺のワイシャツでも隠しきれている。

「これ、結構大きいですね」

「なんでお前の願いが叶ったんだよ……」

「晃平が願ったからじゃないですか？」

「願ってねーよ」

「じゃあ、ただの事故ですね」

「なんだよ、それ……」

「あの質問ですが、人間の姿の私ってどういう感じですか？」

「うーん……猫のときは白かったのに髪の毛、黒いんだな」

「本当ですか？……本当だーそれに結構、長いですね」

「普通だろ。まあ、見た目は結構いいほうなんじゃないか？」

「そうですか？ありがとうございます」

「で、人間になってどうするつもり？」

「高校に行きたいです！」

「……母さんに頼んでみるか？」

「お願いします」

「じゃあ、行くぞ。ついでに着替えも貰うか？」

「はい」

部屋を出てリビングに向かう。

リビングには母さんがいなかった。

キッチンの方を見ると母さんと秋沙が夕食を作っていた。

ピアノ少女と白雪の願い（後書き）

自分はピアノとか、まったく弾けません。
なのでピアノに関することは間違ったことを書いてるかもしれない
です。

では、次話もよろしくお願いします

学校に行くために

「母さん、ちょっといい？」

「ちょっと待って」

母さんは手を洗い、リビングに来る。

「そのかわいい女の子、誰？」

「白雪だよ」

「は？なに言ってるの？白雪は猫でしょ」

「いや、本当だって。それで白雪が学校行きたいらしいから、なんとかしてくれない？」

あと着替えも……」

「へー 白雪かー ずいぶんかわいいじゃない。秋沙も見てみな」

「なにー 誰？この子？」

「白雪だって。かわいいわよね」

「え？猫の？」

「そうだよ。ほら白雪もなんか話せよ」

「えーと……改めてよろしくお願いします」

白雪は深く頭を下げている。

「礼儀正しいわね。学校に行きたいんだっけ？私がなんとかするよ。」

秋沙、白雪に着替え貸してあげて

「うん。今持ってくる」

「よかったな。白雪」

「はい！ありがとうございます」

「ああ、そうだ。もう敬語使うのやめろ」

「えーと、どういうふうにすればいいんですか？」

「無理そうだな……もうそのままでもいいや」

「そうですか……」

「はい、着替え」

「ありがとうございます」

着替えを受け取ると白雪はその場で着替えようとする。

「ここで着替えるのかよ……」

「家族だから、いいじゃないですか？」

「晃平がいるから、むこうで着替えたほうがいいわよ」

「わかりました」

白雪は洗面所の方へ行く。

「晃平、白雪がかわいいからといって変なこと考えたらダメだからね」

「お母さん、お兄ちゃんはそんなことしないよ」

「あたりまえだろ。あいつは猫だぞ？」

「それもそうか……なら大丈夫そうね」

「お待たせしました」

「すげー サイズちょうどいいじゃん」

「はい。秋沙さん、ありがとうございます」

「どういたしまして。白雪は何歳なの？」

「わかりません」

「……」

「どうかしましたか？」

「まあ高校生くらいに見えるし、晃平と同じ年ってことにしておくわ」

「母さん、適當すぎ……」

「いいじゃない。これで秋沙の欲しがってたお姉ちゃんができたわね」

「それとは違うと思うけど……」

「まあ、いいじゃない。じゃあ夕飯の準備続けるわよ」

「はい」

秋沙と母さんはもう一度キッチンに戻る。

「なんか、これから大変になりそうだな」

「なにか言いましたか？」

「え？ なんでもないよ……」

「そういえば今日、音楽室にいた人だけど……」

「ああ、彩音さんのこと？」

「そうです。あの人って……」

「ピアノ上手かったよな」

「そうですね。猫の私にもわかりました」

「猫でもわかるんだ……」

「あたりまえです」

「そういうもんなんだ」

「そうですよ」

「二人ともー ご飯並べるの手伝ってー」

「はいー 今、行くよ」

「私も今、行きます」

母さんに呼ばれ俺と白雪はキッチンに向かう。

そして母さんと秋沙の作った夕食をテーブルの上に並べる。

時刻は六時……まあ、ちょうどいいくらいだろう。

「ただいまー」

ちょうど父さんも帰ってきたみたいだ。

「おかえりなさいー」

その声を聞いて真っ先に玄関に向かったのは白雪だった。

「お！このかわいい子は晃平の彼女か？」

「ちげーよ。白雪だよ」

「なに言っただ？白雪は猫だろ」

「だから俺も信じられないんだよ。」

でも俺の目の前で起きたことだから仕方ないんだよ」

「そうか……じゃあ事実だな。白雪、今日からよろしくな」

「はい。よろしくお願いします」

「ずいぶん礼儀正しいな。それと猫のときは真っ白だったのに髪は

黒いんだな」

「晃平と同じこと言ってますね」

「そうか」

白雪と父さんが一緒に笑っている。

なんで白雪はこんなに簡単に俺の家の人馴染んでるんだよ……
まあ、そういう正確だからおかしくもないのだが。

「もうご飯にするけどいい？」

「うん」

リビングのテーブルのまわりに家族が全員集まる。

俺、秋沙、母さん、父さん、そして白雪……

急に家族が一人増えるっていうのは不思議な気分だ。

でも皆、そして俺も楽しいから白雪が家族になったのはいいことだったのだろう。

家族全員で色々な話をしながら夕食を食べ終える。

いつも賑やかなのだが、ここまで俺が会話に参加したのは初めてかもしれない。

白雪が……たった一人増えただけで夕食がこんなにも変わるなんて思っていなかった。

「白雪は今日どこに寝る？」

母さんが白雪に聞いている。

「晃平の部屋で寝ます」

「えー 白雪は私の部屋で寝なよ。お兄ちゃんの部屋で寝るよりは安心できると思うけど」

「なんだよ、それ。俺が危険みたいじゃないか」

「別にそんなふうに思ってないよー」

「思ってるだろ」

「さあね」

「じゃあ秋沙の部屋に布団、運んでおくからね」

「ありがとうございます」

「どういたしまして。本当に礼儀正しいのね」

母さんは秋沙の部屋に布団を運ぶためにリビングから出ていく。

「あ、そうだ。白雪は私のつけた名前でもいいの？」

「はい。とってもいい名前だと思います」

「なんかすごく嬉しいな」

「お前ら本当、仲いいな。じゃあ俺は風呂入ってくるから」
「うん」

白雪の行動と秋沙の誤解

俺は風呂場に向かう。

脱衣場で服を脱ぎ、風呂の中に入る。

いつもどおり体を洗い流してから浴槽に浸かる。

「はー 本当に白雪にあってからすごいことばかりだな。

最初は喋る猫だけだったけど、今は猫が人になったからな……」

そのとき脱衣場に人の気配を感じる。

気になって見てみると、やはり誰かがいる。

なにか物を探しているようなので母さんだと思った。

ガチャ

浴室のドアが開く。

「私も入っていいですか？」

そこに立っていたのは白雪だ。

もう裸なのだがタオルを持っているため見てはいけない場所は隠れている。

「ちょ……待てよ」

「いいじゃないですか。一回だけ一緒に入ったんですから」

「あのときは猫の姿だったろ……」

「関係ありませんよ」

「俺が関係あるんだよ！せめて胸くらい隠せよ！」

「そういうものなんですか？」

「そうだよ！いいから隠せ！」

「はい」

そして、白雪は湯船の中に入ってくる。

「ちょ……狭いから入ってくるなよ！」

「いいじゃないですかー」

「あー もう！お前は明日から学校に通うんだから常識というものを知れ！」

そして今すぐ風呂場から出ていけ！」

「すいません……」

白雪が少し涙目になっているように見えた……

白雪はそのままゆっくりと風呂場から出ていく。

今まであんなに明るかった白雪がこんなふうになるとは思わなかった……

少し言いすぎたかもしれないが、このくらいがちょうどいいかもしれない……

そのときダダダッ！と廊下を走る音が聞こえてくる。

そして風呂場のドアがありえないほど大きな音を出しながら開く。

「お兄ちゃん！白雪を泣かせるなんて最低ね！」

「ちょ……えー？」

「信じてたのに……」

「待て！誤解だって！」

秋沙はまた走ってどこかへ行ってしまう。

「あーあ、やっちゃったね」

「母さんもかよ……」

「私は晃平がなにもしてないって信じてるけど？」

「ありがとう……」

「じゃ、私は戻ってるから早く風呂入っちゃってね」

母さんは静かに風呂場のドアを閉めていく。

「はーなにやってんだろ俺……」

白雪を傷つけて、秋沙には嫌われる……

こんななんだったら、俺に皆と家族である資格なんてないよな……

今日は暗い雰囲気のまま入浴を済ませる。

リビングに行けば皆もいる……

でも、ここにずっといるわけにはいかない。

覚悟を決め脱衣場から出て、リビングに向かう。

「お兄ちゃん、白雪に謝って！」

「わかってるよ……」

白雪……ごめん。ちょっと言い過ぎた……」

「晃平は悪くないです。私が人間の常識をなにも知らなかったからです……」

「え？　どういうこと？」

「晃平は秋沙が思ってることは、なにもしてないってこと」

「え？　私がバカみたいじゃん……」

「秋沙、勘違いしてたのは秋沙なんだから晃平に謝りなさい」

「お兄ちゃん……ごめんね……」

「ああ、誤解が解ければそれでいいんだよ。」

白雪も明日から、ちゃんと常識を学んでいくんだぞ」

「はい」

なんとか秋沙の誤解も解けたわけだし、もう寝るかな……
そう思って部屋に向かおうとする。

「あれ？　もう寝るの？」

「うん。おやすみ」

「おやすみなさい」

母さんに言い部屋に向かう。

布団の中に入り、目を閉じるとすぐに眠りについてしまった。

☆ ☆ ☆

「あれ？　お兄ちゃん寝ちゃったの？」

「うん。今、部屋に行ったよ」

「じゃあ私たちも寝ましょう」

「はい」

秋沙と白雪は秋沙の部屋に向かう。

そして秋沙はベッドに、白雪は母さんが敷いた布団に寝る。

「あの秋沙、ちょっといいですか？」

「なに？」

「秋沙って……晃平のこと、どう思いますか？」

「え？」

「晃平のこと、いい人だと思いますか？」

「うん。すごくいい人だと思うよ。優しいし、お兄ちゃんとしてもいいと思うし」

「やっぱり、そうですね。私も晃平がすごくいい人だと思います。だから明日から一緒に学校に通えることになったとき、とても嬉しかったんです。」

でも……また迷惑かけちゃいそうで……」

「そんなこと気にしなくていいと思うよ」

「なんで、ですか？」

「お兄ちゃんは……うまく言えないけど、そんなことで怒ったりする人じゃないから」

「そうですね。安心しました」

「じゃあ、明日から学校生活がんばってね」

「はい」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6108x/>

CLEAR

2011年10月22日11時05分発行